

紅燈明暗の巷にして、大禁物たるべき政戦を平凡裡に過ぎ去り往きて、梅に笑はせ柳に誘ふその春風の訪れ、私達のいと楽しい面白かるべき春は来れよと。

去る日マダム姿で準備で上野行の二等室に身を沈めつつ、南進した妓は誰でせうか、當てて御覽なさい。

〇〇家の〇千代姐さん、嗚ぞ御約束が實行されたらね「春の情はこゝにも芽ぐむ、日蔭草にも花が咲く」

▲我等の支持せる〇〇候補は辛うじて當選した、ヤレ、水戸行きの御同伴とキメた〇〇目〇〇長〇〇さんは「梅を見るには世間の手前、見ても見飽かぬ花がある」花とは三好家のよし子御前かね。

▲千代姐さん御安心なさいよ天理教の御利益もあるでせうね、〇〇さんに先日御目に懸つたら「逢ひ不足淋しい想ひは私も同じ御前一人ぢやない苦勞」ですと申して居りましたよ、何をオゴリませう。

頼る好評の二大婦人薬  
座 美 美 神 神 丸  
内 服 美 美 神 神 湯

代理店 山野邊藥局  
平町五丁目角

▲新田町の或る〇〇さん、頼る付きの天狗さんです、ワタは四年度限り(三月一杯の事)で廢業するので、ね赤き手柄の鬚は先妻ソツクリでせうとの噂トリ。

▲竹の家文奴姐さん、本當でせうか「春の情に急立てられて溶けざるまの山の雪」かね

▲〇〇家〇〇君、〇〇さんも随分の薄情者ね「逢ひたい心をじつとこらへ一人さみしく暮す春」も御同情申上げますわ。

▲安積の平原に去りたる戀人若きアルマン青年を訪ねてアノ降雪中かよわき女の身にて、其熱烈なる赤き戀の焰には春の淡雪も解けるでせう、然し此の劇の主人公は新田町何んぞ申す妓ですかね、御心當りの醉人は電話〇五二に願ひま

▲〇形家の〇路さん、マサカね「別れ話の冷い酒に、落ちた涙のながい味」かね。

▲谷口の政勇君、随分ね、君もヒスさんだね「瓜彈のいつか別れたあの夜の唄に思ひ出されて湧く涙」でせうか、八百条の離れでね。

▲仲家の小清姐さん「ほろり落ちたる椿見では狭い心に又戻る」なんです、御承知を願ひます。

▲同家に居つた福助君、恵まれた海風に造作迄同化されて、色男の〇〇さん小名濱へ御出張時丈けでは逢ひ不足の由にて去る日ねでせうよ、〇〇さんねです。

▲林家の菊丸君、何もそのやうに御立腹なさらなくつてよいでせう「梅に忍んだ移り香な

ぞと様の嘘つき臘月」かね。

▲久本のぼたん、靈肉俱に發達せる様です、御心配の醉人もありましたよ「遠い様でも近いは戀よ、谷の窩里の梅」なりとす。

▲去る夜旗亭で〇〇君頻りに其経過報告をして居たつて、何の話と思つたら觀光團の提出で〇〇ですと、〇〇さん嬉れしい事です。

▲出船の港も今は閑散だね、眞佐の家小豊は故郷東京へ、中村へ御轉任と披露した彼の小高は居据りて決す、洋行中の代議婦もあるとす、すが次號で詳しく御報告申上ます。

舊正月元日より  
娛樂場開始  
ラジウム旅館上

平 城 山

園 樂 聚

治 近 田 飯 主 園

飲食物の用意無之に  
付き御隨意御持参願  
上候

一日席料茶代共  
大人廿錢 小人十錢

和洋銅鐵金物問屋

釜屋商店

諸橋久太郎

電話九番・一三九番

開業廣告

今般左記ノ通り開業致候間此段及謹告候  
昭和五年三月一日

專門 内科 一般

住宅 診時間 午前七時より午後十時迄  
但し急患はこの限りにあらず

平町南町六五(元大和田耳鼻科跡)

川井内科診療所

電話七二二二番

醫學士 川井重之  
女 醫 川井安子

生徒募集

婦人にも職業の必要な時代が参りました  
そして婦人に最もふさわしい職業は

産婆・看護婦 せう

一ヶ年で卒業が出来  
収益も多大で又家庭の一助ともなる産婆  
及看護學を推薦致します

御希望の方は最も成績の良い

平 南 町

平 看護婦學校

電話三〇七番

生徒募集廣告

一、募集生徒

一、本科生 一百人

一、普通科 第一學年 百五十人

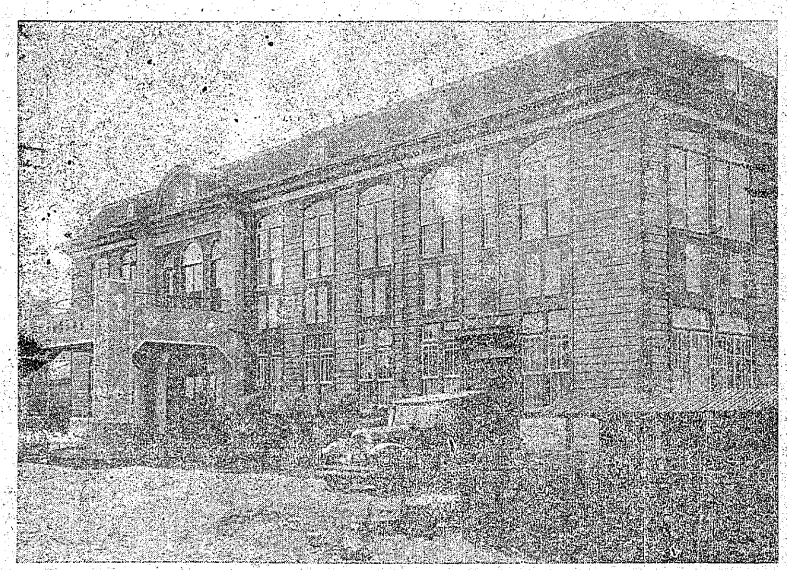
一、普通科 第二學年 若干人

一、願書提出期限 四月六日

右 募 集 ス

磐城佑賢學舎

電話七一〇番



院病濟共城磐  
番一四六話電町平